佐原の町並み
かわら版

第６１号
平成３０年２月

発行　ＮＰＯ法人小野川と佐原の町並みを考える会
佐原町並み保存会

お問い合わせ
佐原町並み交流館
電話　0478(52)1000

町並みはみんなの宝物、百年後を見据えて

～第八回関東町並みゼミin佐原～

「町並みはみんなの宝物、その歴史的風致を保つためには」をテーマに昨年十月二九日(日)に「小野川と佐原の町並みを考える会」主催、全国町並み保存連盟関東ブロックと佐原商工会議所共催で「第八回・関東町並みゼミin佐原」が開催されました。与倉屋大土蔵を主会場にして、基調講演会と第一分科会、佐原町並み交流館で第二分科会が行われました。

当日は、建物公開の第二日目に当たり、午前十時よりゼミ参加者三十名による町並み見学が吉田昌司さんのガイドで行なわれました。

午後十二時三十分、菅井國郎氏の司会進行により開会。「考える会」の佐藤健太良理事長と全国町並み保存連盟・関東ブロック長の荒牧澄多氏の挨拶に続いて、佐藤健太良氏が「開催地からの報告」を行いました。

挨拶する佐藤健太良氏

佐原の町並みが「重伝建」に指定されるまでの道のりと東日本大震災による建物被害と国内外からの温かい支援によって修復が終わり立ち直るまでの過程をたどる報告でした。

基調講演は、千葉大学大学院教授のマーティン・モリス氏が「歴史的町並みの価値と保存を支える人々の思い」と題して行いました。

マーティン・モリス氏

英国のナショナル・トラスト運動を根底にした世界の動向を歴史的に検証しつつ、町並みの景観保存の価値を力説しました。日本国内の取り組みとの接点も指摘して、先進国との価値観を共有して「この町並みは百年後まで残せる」という基本理念は確認できました。

第一分科会は「町並み保存の制度と市民の関わり」をテーマに、ディスカバーまかべ理事長の五妻周一氏、栃木地区町並み協議会事務局長の阿部佳司氏をパネリストに、それぞれの地域の現状が報告されました。各地域は、町並み保存について様々な問題点を抱えており、その解決には市民の忍耐強い努力が欠かせないこと、また「災害からの復興」には伝建や歴まち法制度がとても有効に働いたことが指摘されました。

第二分科会は「町並み景観は歴史性を踏まえて創り出せるもの」をテーマに、川越市の蔵の会デザイン部会の松本康弘氏、茨城県建築士会石岡支部の島田哲氏、佐原からは高橋賢一氏をパネリストに行われました。

まず、高橋氏が「佐原の保存修景の実績」を報告した後、川越市の現状と石岡市の看板建築保存について話が進みました。

その最中に、香取市から「洪水警報」の発令があり、討論の中断を余儀なくされたのは残念でした。

佐原小２年生が『佐原学』を発表

昨年12月15日、佐原町並み交流館において佐原小学校２年生による『佐原学』の発表がありました。児童がグループに分かれて町並みの商家や観光施設を探検（訪問）、佐原っ子ならではの質問やインタビューをして、その調査結果をまとめ、訪問先商家の皆さんを招待して成果を公開しました。

成果を発表する佐原小学生

熱心に調査する姿も素晴らしく、市民とのすてきな出会いもあって貴重な体験ができただけでなく、佐原の町や町に暮らす人々への愛着が深まったとの感想も聞かれました。

日頃、学校からの帰路や休日に佐原町並み交流館には大勢の児童が立ち寄り、「夢は色々あるけれど、やっぱり佐原に住みたい」、「佐原の祭りは最高だ」「もっと佐原の良いところを日本や外国の人達にも知らせたい」等の寄せ書きも残しています。

次代の佐原を託す子ども達が、郷土を誇りにして地域づくりを担い「生き続ける町並み」を作っていく頼もしい観光大使となって活躍することが期待されます。佐原小学校外周の小野川沿いの遊歩道にある発表掲示板もご覧になってください。

（佐原町並み交流館館長：高谷正弘）

伊能忠敬お墓参りと中川船番所資料館見学研修

日　時：平成30年3月15日（木）
集　合：香取市役所駐車場　午前8時15分
会　費：3,500円
（上野源空寺、昼食「葵丸進」、中川船番所資料館）
申し込み締め切り：平成30年3月5日（月）
申し込み先：NPO小野川と佐原の町並みを考える会
佐原町並み交流館内 Tel 0478-52-1000 Fax 0478-54-7766
mail: sawara.machi@yahoo.co.jp

「さわらぼ」の活動
高校生のまちづくりプロジェクト

正月明けの一月六日から土日、祝日の午後を利用しながら、八坂神社前の「旧岩瀬漬物店」のスペースで「さわらぼスイッチ」の作業が一月二八日の公開に向けて進められてきました。

「さわらぼ」とは、平成二六年に小野川の中橋際にある修復後の「旧飯田家」を拠点に「東京大学大学院都市デザイン研究室佐原プロジェクトチーム」と「佐原高校生のまちづくりプロジェクト（ＳＭＰ）」とが協働して「さわら＋ラボラトリー（さわらぼ）」となり、若い力を町づくりに生かす活動を始めたものです。

「旧飯田家」が市へ寄贈された後「やまゆ」の営業を開始してからは、拠点を他の空家や蔵等に移して、講師を招いて佐原の歴史を学習したり、地域の諸団体との協働活動や部活動の発表の場を作って来ました。

「ニュートンのゆりかご」を完成させて

平成二八年には、千葉県主催「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」（成田市開催）に参加して活動状況を発表しました。

その他、夏・秋の大祭での聞き取り調査、将棋同好会の対局会、古民家での合唱会や演劇公演、佐原おかみさん会の盆フェスタの書道等のパフォーマンス、馬場酒造蔵内での東日本大震災の被害復興報告、吹奏楽部のミニコンサート等の活動を積み重ねて来ました。

そして、今年最初の「さわらぼ」の活動が、小学二年生～七十代の幅広い市民の参加による「ピタゴラスイッチ」ならぬ巨大「さわらぼ・スイッチ」の作製（チーフ・亀村拓洋君・佐原高校二年）でした。

今後は香取市と「小野川と佐原の町並みを考える会」の協力を得ながら「空家」を利用した「市民の交流の場づくり」をめざします。

～昭和は遠くなりにけり～
好評の懐かしの昭和展
降る雪や明治は遠くなりにけり

昭和6年に母校の小学校の近くを歩いていた折、現代風の子ども達の姿を見て、20年前の明治を振り返り詠んだ俳人・中村草田男（明治34年～昭和58年）の名句です。

今年はすでに平成30年。文字通り「昭和は遠くなりにけり」となりました。そして、平成29年8月21日～9月30日まで、佐原町並み交流館一階ホールで「懐かしの昭和展」が開催されました。高谷交流館館長さんの収集品を中心とした昭和の道具類などの展示で、当初は、どれほどの反応があるものかと不安視する面もありましたが、結果は大好評でした。

展示後も、コーナーが設けられ、来館者がブラウン管テレビ、足踏み式オルガンや電話などに直接触れて「懐かしさ」にひたる光景が見られます。その後も、貴重な骨董品に相当する品物、歴史資料などの提供が相次いでいます。

もう日本では見られなくなった蚊帳の下で

神崎町河岸通りにあった佐藤薬輔に掲げられていた「日本で最初の液体目薬」の看板

佐原町並み交流館・入館者数

平成29年1月～12月 **135,206名**
7月の大祭（14～16日）26,509名
10月秋の大祭（13～15日）　2,962名

町並み案内班・観光客案内人数

平成29年1月～12月　**14,763名**

Stanford Universityからの通知

スタンフォード大学図書館(East Asia Library)より、日本の町並み保存活動関連として、小野川と佐原の町並みを考える会の「ホームページへようこそ」のサイトをウェブ・アーカイブ・コレクションに加えることになったとの通知が12月14日に届きました。The Stanford Digital Repository として知られるデジタル・コレクション・ポータルを通じて、世界中から情報を検索・閲覧することが可能となり、同コレクションの重要な一部分として、歴史的な記録になると考えられます。

町並み交流館の行事

八月一日(火)～二十日(日)　北澤聖江「佐原・大祭・母と子と」絵画展
九月十六日(土)　佐原商工会議所・賑わい事業コンサート・木管五重奏の調べ
十月二日(月)～二十日(金)　「佐原の大祭を描く二人展」・古河博章・篠塚喜一作品展色鉛筆・ペン画で描く佐原の大祭
十月二四日(火)～十一月三日(金・祝)　「佐原商家の出入り半纏」江戸優り佐原・文化芸術祭事業
十一月四日(土)～十九日(日)　「ミニチュアフード・ドールハウス」展、ミニチュア研究会代表・橋本京子
十一月二十日(月)～二五日(土)　「秋季盆栽」展・日本盆栽協水郷支部
十一月二六日(日)～十二月九日(土)　「時の流れに感謝して・佐原との出逢い」魚谷幸子作品展
十二月十日(日)　「席上揮毫」書星会師範・本宮華水
十二月十二日(火)～二六日(火)　「佐原の観光と祭り」写真コンクール平成二九年入賞者作品展
十二月二八日(木)～平成三十年一月十四日(日)　お正月飾り
十二月二八日(木)～平成三十年一月二八日(日)　「山の自然を編んで・つる工芸」国立新美術館現展入賞作家・藤ケ崎たつ子作品展
二月十日(土)～三月二五日(日)　さわら雛めぐり～お雛さまの舟遊び～
三月十日(土)　「さわら雛舟（ひなぶね）」

小野川沿いと香取街道の重伝建地区
徐々に変わり行く佐原の景観

一九六四年の東京オリンピックがきっかけとなり、日本の国土が大改造されて行きました。二〇二〇年の東京オリンピックが、佐原の中心にある小野川と香取街道沿いの重伝建地区の景観に、今までにない変化をもたらしてきているのが市民にはっきりと見えてきています。

上川岸小公園施設の建設

いま、小野川沿いの旧佐原印刷の跡地に香取市が「上川岸小公園施設」を建設しています（写真・上）。日本の伝統的な外観で、土産品や喫茶コーナーがあり中庭を隔てて二階部分があるようで、この六月には完成します。さらに、正文堂の隣には、千葉商船が新社屋を建設中す。

小野川沿いの電線地中化が完了して、香取街道の伝建景観地区の工事も進められて、遠からず香取街道沿いの電柱が消えます。

ニッポニア・サワラとは

さらに、重伝建地区に宿泊施設の建設が続いています。「ニッポニア・サワラ」という会社が昨年十一月十日に設立されて事業を開始しています。社名は、日本を象徴する鳥「トキ」の学名「ニッポニア・ニッポン」に由来し、日本の歴史的な町並みや暮らしをホテルとして生かしていくといいます。京葉銀行と政府系ファンドが資金二億円を出し、佐原だけでなく香取市を「滞在型観光地」に転換していくことをめざします。

すでに古民家四棟八部屋を改修し、日本的な寝室を整備し（写真・下）、受付事務等を行なう忠敬橋際の中村屋の室内改造も進んでいます。

夜も賑わう小野川沿い

佐原の重伝建地区に多くの宿泊客が滞在するとなると小野川沿いの状況は一変するに違いありません。

観光客に安全で静かな町並みを散策していただくためには、市民あげての研修で、今までに経験のない「おもてなしの心」の養成が必要になってきます。

（新井勝治）

伊能忠誨（ただのり）と祖父忠敬（その２）

～忠敬の孫教育～

文化10年（1813）3月5日付の忠敬の手紙は、九州の第2次測量を終える目途がついた頃、佐原にいる娘の妙薫に宛てたものである。その中で忠敬は、江戸に戻ったら嫡孫の三治郎（のちの忠誨）を手元に置いて育てたい、三治郎の母親のリテに宜しく頼んでおいて欲しいというのである。その後の手紙でも「引き取り置き、なるたけ指南致す」「自分の所に差置き、仕立て候」と繰り返している。

江戸の忠敬に引き取られた三治郎は、9歳の頃から御家流の手習いの師匠の花形東秀に、さらには玉江文蔵へ入門することになった。また伊能測量隊の江戸府内測量に三治郎を連れて行き、見学させている。また、忠敬の代理として佐原村の領主である旗本津田家へ年始の挨拶に行かせたり節句などの返礼やお悔やみの使いなどをさせている。また、佐原へは「三治郎は読書、手習いともに励み、論語の最初の方を覚えた。習字もうまくなった」「三治郎の素読に使うので春秋左氏伝を早船か飛脚便で送るように」と知らせており、孫教育は順調かに見えた。

文化14年（1817）、72歳の忠敬は、三治郎について、我が手に余る難しき者なので佐藤一斎へ入門させると佐原に書き送った。佐藤一斎は江戸後期を代表する儒学者であり、その著書は吉田松陰や西郷隆盛に影響を与えた人物である。しかし、三治郎は佐藤一斎に住み込みで入塾したものの2ケ月余で忠敬のもとへ戻ることになった。佐久間象山や渡辺崋山が佐藤一斎に入門したのは20歳前後であり、11歳の忠誨には無理があったようである。

水戸藩の漢学者である小宮山楓軒は、忠敬の孫教育について次のように記している。三治郎は久保木清淵の門人で暦学などがよく出来る。忠敬が厳しく教育するので人々は三治郎が早死にするのではないかと心配すると、忠敬は「学ばないで長生きするより、学んで短命なほうがいいのだ」と言ったというのである。また、高橋至時の次男である渋川景佑は、忠敬について「人の怠慢なるを嫌う。人或いは過ぎて性急という」と評している。身内や弟子に厳しい忠敬は、孫にも厳しい祖父であった。（玉造　功）

『考える会』の主な事業

八月　二日　理事会
十八日　第三回佐原の町並み保存を知る会
三十日　三菱館改修ヒアリング
九月十四日　三菱館３Ｄ撮影清水建設
十五日　第四回佐原の町並み保存を知る会
二三日～二四日　東京ビッグサイト伊能忠敬歩測体験
十月　二日　小野川清掃
十三日～十五日　新宿祭礼
二十日　第五回佐原の町並み保存を知る会
二八日～二九日　建物公開
三一日　ＷＭＦ視察
十一月九日　三菱銀行保存委員会
十四日　千葉県ボランティアガイド協北総エリア会議（銚子）
十六日　理事会
十七日　第六回佐原の町並み保存を知る会
十七日～十九日　第四十回全国町並みゼミ名古屋有松
十二月十日　席上揮毫　本宮華水氏
十五日　第七回佐原の町並み保存を知る会
一月　六日　獅子舞
十一日　立教大学現地調査
十三日　佐倉臼井公民館研修
十九日　第八回佐原の町並み保存を知る会
二三日　韓国市民環境研究所視察
三一日　理事会

※第一日曜日は骨董市（一月七日は第一四〇回目）
※案内班は毎月一回の定例会議。

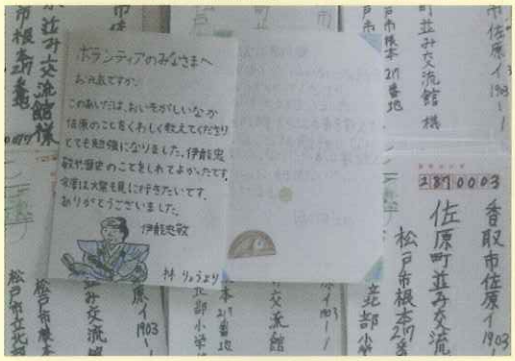
観光案内に感謝の礼状（その19）

佐原町並み交流館の皆さまへ。寒くなりましたが、先日（12月12日）は校外学習で大変お世話になりました君津市立周南小学校４年生です。

山車会館、伊能忠敬旧宅、伊能忠敬記念館、そして佐原の町並みを子どもたちは学習しながら満喫させていただきました。帰校してからその体験を新聞にまとめ、役立たせていただきました。

佐原の方たちが忠敬先生を誇りに思っていらっしゃること、古い町並み～小江戸～をずっと守って代々引き継がれているお話をうかがいよく理解できました。お店へも入らせていただき、店員の皆さまには暖かく見守っていただきました（失礼はなかったでしょうか）。子どもたちは「また行きたい！」と話しています。

（君津市周南小４年生・学年主任）



生徒81名がハガキ一枚ずつにお礼を書いて送ってくれました（写真）。（松戸市北部小）

町並みを歩いて（その十六）

重伝建地区の隠れた魅力を発掘

「広辞苑」の編者・新村出

佐原ゆかりの人物を話題にする時、佐原地区の皆さんでもあまりご存知ない有名人が沢山いる。

今年一月十二日に岩波書店の「広辞苑・第七版」が発刊されて評判になったが、日本語辞書の代名詞「広辞苑」（一九五五年初版）の編者である新村出氏（しんむら・いづる、明治九年～昭和四二年）が幼少期を佐原の一郭で三年間も暮らしていたことを忘れてはいけない。

山口県令の関口隆吉（元慶喜の側近）の次男として山口県の山口で生まれ、前任地の山形県から転任直後だったので「山」という字を二つ重ねて名づけられた。父が静岡県知事となったので静岡中から一高、東大、のち京都大学教授となった。

階段を上れば右側に常照寺跡

その間、父の鉄道事故死に会った十四歳の時、徳川慶喜の「そば仕え」であった新村猛雄（養女が慶喜の側室の信）の養子となった。

父隆吉は、明治十七年に小学校高学年になった満八歳の出少年を、東京向島本町小学校から佐原諏訪下の「常照寺」で朱子学者・栗本義喬が開いていた漢学塾「螟蛉塾（めいれいじゅく）」に三年ほど送り込んだ。

「常照寺」は、法界寺の横道を諏訪公園方面へ歩いて遍照院入り口を抜けて、正面階段を登ると「常照寺縁起」が建っている。

〔新村出が当時を回顧した二首〕

いとけなき童べのむかしおもほえて佐原香取はなつかしきかな

諏訪の岡のふもとの鄙の寺子屋にただ漢籍の物学びせし

伊能忠敬第八次全国測量

二度目の九州へ最過酷の旅

～支隊長坂部貞兵衛の死～

文化八年十一月二五日には恒例の富岡八幡宮参拝し九州への二度目の旅に出た。品川宿で間宮林蔵や佐原村名主伊能藤左衛門、本家より妙薫、おりて、孫の三治郎（のち忠誨）等が見送った。

二度目の九州行きは、前回の測量で天候の悪化のため断念した屋久島や種子島、天草諸島の測量が主眼で、忠敬が六六歳～六九歳にかけての九百十三日間の大旅行となった。

初めに大山神社から富士山麓を回り東海道へ、山陽道、長崎街道、鹿児島へ直行。屋久島等を測量して北上。壱岐、対馬、五島列島西海岸に。

坂部貞兵衛が斃れる

文化十年六月二四日、副隊長・坂部貞兵衛が五島列島西海岸を測量中に倒れて福江島で治療していたが忠敬たちの看病もむなしく、七月十五日、四二歳で亡くなった。坂部は文化三年にも萩で病気になり藩医の往診を受けているので、薩摩諸島の測量での過労が負担となったのではないかと思われる。

忠敬は「鳥の翼を失ったに等しい」と娘の妙薫へ書き送った。

薩摩藩の測量

九州各藩は総力を挙げて伊能隊に協力した。薩摩藩主は十代斉興だったが実権は祖父である重豪（しげひで）にあった。重豪の開化主義による膨大な出費によって藩財政が逼迫していたにもかかわらず、測量の意義は十分に理解したのか、薩摩藩の家格を保つという意味もあり、種子島へは七十名余の人員と多数の手伝い人足を派遣してくれた。

第七次測量では薩摩の滞在は百三十一日間だったが、第八次測量では薩摩入国は文化九年二月二五日、出国は五月三十日で、のべ九五日間であった。

すでに長男景敬も死す

貞兵衛を失った以上の悲劇の報は九州の忠敬には届かなかった。佐原では長男景敬がすでに貞兵衛の死に先立つ六月七日に亡くなっていたのだ。娘妙薫は「景敬が大病」であるとだけ書き送っていた。

忠敬は、京都、野麦峠から中仙道を上る頃、周囲の様子から長男の死に気付いたであろう。

文化十一年（一八一四）五月二二日に板橋宿着。出迎えの人々との悲しい再会は想像するにしのびないものがある。

すでに忠敬は六九歳になっていた。